

新刊
紹介

千葉成夫『絵画の近代の始まり』

(五柳書院、2008年)**

千葉成夫の近著『絵画の近代の始まり ―カラヴァッジオ、フェルメール、ゴッホ―』(五柳書院、2008年)は刺激的な、もっと言えば挑発的な書き出しで始まり、我々の(少なくとも私の)さして根拠のない曖昧な思いこみを見事に打ち砕いてくれる。

「序章 近代まで」では、西欧美術の始まりからルネサンスまでを概観し、そこで著者の西欧美術に対する見取り図が表明される。

ひょっとして人々は、西欧美術は長い長い歴史をもっていると、そういうふうに思っているかもしれないが、それはじつは、すくなくとも美術そのものとしては、けっこう新しくはじまったものにすぎない。

本格的なキリスト教美術といえば、それはやはり、東方キリスト教では六世紀以降のことになるし、西方キリスト教では十世紀末以降のことになる。

それ(東方キリスト教の美術 高木注)を後の西欧社会と直接的に結びつけることには無理がある。西欧美術の元ではない、という意味である。

キリスト教美術の三様式として「ビザンチン、ロマネスク、ゴシック」を挙げるのがふつうである。それに間違いはないのだが、このビザンチンと後の二者は、はっきり別のものであるというべきだ。(中略)西方のキリ

スト教美術は「ロマネスク」から始まるものという。

そして次に、「ルネサンス美術」をどうとらえるかという問題を俎上に上げる。

「ルネサンス」とは、どちらかというなら、「中世」の最末期、その最終段階である。「近代」は十七世紀から始まる。ルネサンスが明で中世は暗というクリシェは、いちど完全にご破算にすべきである。いや、むしろひっくりかえされたほうがいい。中世は明るくルネサンスは暗かった、というようにだ。

中世がスタートするロマネスク美術の時代は、希望にみちみちた、きわめて明るい時代だったといえるだろう。中世は明るい時代であり、ルネサンスはとてつもなく暗い時代だった。だから、ルネサンスは花々が咲き乱れるような明るい時代だったといった、かつて僕たちがいだいていたイメージは、おそらく相当に修正をほどこされる必要がある。

むしろ、途方もなく暗い時代だったからこそ意味があったといったらいいたろうか。暗かったからこそ、光を求めて足掻き、何かを作り出そうと懸命になったのである。ルネサンスとは、そういう暗中模索が生み出したものだと、そういうべきではないだろうか。

「中世」と「近代」とのあいだには、このような

*中部大学現代教育学部児童教育学科

**ISBN : 9784901646130

意味での「イタリア・ルネサンス」があった。それは決して「華」の時代ではなくて、一種の生みの苦しみの時代であり、過渡期の混沌と混沌の時代なのである。いまだに「中世」の枠組みにとらわれながらも、その枠組みにはもう収まり切らないものが、たくさん噴出し始めていた時代なのである。

こうした前置きの後に、「第一章 カラヴァッジオ——人間の誕生」「第二章 フェルメール——視角の変容」「付章 目は、触れる——フェルメールと映画『オランダの光』」「第三章 ゴヤ——感覚の彼方、人間の向う側」と展開される。カラヴァッジオ(16～17世紀、イタリア)、フェルメール(17世紀、オランダ)、ゴヤ(18～19世紀、スペイン)と、時代も国も異なる三人の画家を取り上げることで、「絵画の近代の始まり」を論じようとする目論見であろう。

第一章では、「画家ではなくて職人だった」カラヴァッジオの傑作を取り上げ、『光』の効果的な使いかた」に注目する。そして、肖像画などを別にすれば「キリスト教絵画を描き続けた」彼が、その最晩年において「神からの離脱」の方向に一步踏み出していることを指摘している。

第二章では、宗教画をまったく描かなかったフェルメールを取り上げ、その絵に寓意を見る考えを排除し、「この『光』、この『空間』こそが、フェルメールの絵の『なかみ』なのであり」と力説する。そして著者は、フェルメールの傑作群の「緊迫感(空間の密度)」に注目し、「カーテンや机の向う側にひろがる空間、その世界」の美しさを賞賛する。「フェルメール自身の意識としては、むしろまだ、日常生活をそのまま描いている、のだ。けれども、できあがった絵は、別の世界というほかはない輝きを帯びてしまっ

ている。」と述べ、対象物と眼とのあいだの「心的空間」に視覚の「近代」を見る。

第三章は、「肖像画」や「黒い絵」の画家ゴヤである。絵画表現としては「内面」が「外面」と不即不離だった時代にあって、ゴヤの肖像画は、実物そっくりという線を越えて、描写がその向う側(人格、性格、気質、心理)へまで到達していると著者は見る。ただゴヤの「眼」はそこまで踏み込み始めているのに、ゴヤ自身はそのことを認識していない。

この三つの章で詳述された画家たちの共通点を一言にまとめれば、画家本人がたぶん意識しないまま、その「眼」が、あるいはその「手」が、「近代」の側に一步踏み越えてしまった、そういう絵を描いた画家たちであると言えないだろうか。著者の意図もそこにあるように思われる。

時代も場所も画風も、すべて異なる三人の画家たち。彼らの絵を、丹念にそして虚心に見ることで、彼らが近代の扉を開け放つ瞬間に我々も立ち会うことができる。本書はその恰好の手引きとなろう。

最後に、本書はところどころで西欧史や西欧美術史の復習をしている箇所があり、お蔭でそうした知識が皆無の私のような読者にも読みやすい本になっていることをつけ加えておく。